D is D
of the Devil
kasy/meitei

第１章

４月だというのに、その日は３０度を超えていた。
東京郊外のＪＲの駅のプラットフォームに、
その青年は立っていた。

改札口に向けて、ゆっくりと階段を降りていく。
この暑さにもかかわらず、上下黒いレザーの
ジャケットとパンツを身につけている。
そのジャケットには無数の鋲が打ち込まれており、
彼が一歩踏み出すごとに、一つ一つが銀色に輝く。
髪は肩にかかるほどの黒い長髪で、軽くウェーブが
かかっている。
細い身体に小さな顔。そのルックスは
女性と見間違えるほど、中性的だ。

彼は駅の外に出た。容赦ない太陽の光は
路面を照り返し、彼自身を陽炎のように
揺らめかせた・・・。

BAZUBI BAZABU LAC LEKH・・・・・・

「えー本日は新任の先生を紹介します。英語を担当していただきます、
　江野生人（えの　いくと）先生です。
　えー、江野先生は、かの有名なハーバード大学を主席で
　卒業した素晴らしい経歴の持ち主で・・・」

まただ。生徒たちはげんなりしていた。
澤田教頭の長演説。誰もまともに聞いてはいない。
生徒たちの側面に立ち並ぶ教員たちも、心の中では
辟易しているはずだ。

「・・・というわけで」
何が、というわけで・・・だ？
生徒の中には、あからさまにあくびを漏らす者もいる。

さっさと引っ込め。それにこんなくだらない朝礼なんか
早く終わらせろ。これが大半の生徒の気持ちだった。

「では、江野先生に一言ごあいさつを・・・」

壇上に一人の青年が上がった。
そのとたん、生徒たちにわずかなどよめきが起こった。
特に女生徒たちの反応が際立つ。

「江野生人といいます。英語を担当しています。
　どうぞ、よろしく」
壇上の青年は軽く会釈をする。
一種異様なのはそのファッションだった。
上下レザーの鋲のついたジャケットとパンツ。
同じくレザーのベルトを６本も腰に巻いている。
まるでロック・スターのような出で立ちだ。
そして何よりも、女生徒たちの目を釘付けにしたのはそのルックス。
女性と見まがう・・・というよりも美女のような
顔立ち。そして聞く者を魅了するハスキーヴォイス。
女生徒はおろか、女性教員の間からもざわめきが起こる。

ただ教員の中に一人だけ、その江野生人を無表情で見つめる
者がいた。

光翼（こうよく）学園高等学校―――東京郊外に位置する私立高校である。
生徒数は全学年合わせて１０００人程。
経営するのは法人財団光翼グループ。
鉛筆から軍事兵器までを担う、日本の財閥の一つである。
設立は１０年でまだ新しい学校だ。
偏差値は６４程度で決して高くは無い。
全国の進学校でも、上位２００位にも入らない。
だが、光翼グループが経営するとあっては
そうであってはならない。
年々難関大学への進学率を高めるため、
学業の効率を計っている。
その目的のためには、優秀な教員の採用が不可欠だ。
江野生人はその高学歴と帰国子女という経歴を

買われてこの学園にスカウトされた・・・。
と書面では認められている。

２年１組。教師が教室に入る直前まで
騒然と騒いでいるのは日常の風景。
スマホをいじっている者、サッカーボールを
投げ合っている者、おしゃべりに興じる者。

教室の扉が開き、教員が入っても
なお収まらないのが、この年頃だ。
だが、この日に限って、そうではなかった。
教室に江野が現れたとたん、静まり返った。
まるで教会のように・・・・・・

最初に入ってきたのは、担任の森川だ。
年齢は４０代で、でっぷりとした太鼓腹の
肥満体だ。頭髪は天然パーマで乱れがひどい。
黒縁メガネの奥の細い目は、陰険な光を放っている。
当然、生徒たちには嫌われているが、
森川は女生徒だけには、下心見え見えに優しい。

彼の後から入って来た男を見て、
教室は静まり返った。

「朝礼でもいいましたように、
　新任の先生が、このクラスの副担任に
　なりました。では、さっそく自己紹介を
　していたきましょう」
森川はそう言うと、場所を開けた。

「今日からこのクラスの副担任になりました
　江野生人（えのいくと）といいます。
　森川先生と協力しながら、みなさんの
　学業の力添えができればと、思っています」
江野はそう言うと振り返って、黒板に向かう。

チョークを手にし、自分の名前を横書きで
大きく書いた。再び、生徒に向き直ると一礼する。
その顔には何の感情も読み取れない。
まるで能面のように無表情だ。

だが女生徒たちは、江野の姿に見とれその瞳は潤んでいる。
男子生徒たちはそんな女子たちを、呆れ顔で眺めていた。

「では、これで朝のホームルームを終わります」
森川はそう言うと、江野と共に教室を出て行った。
２人が出て行くと教室の静寂が一気に崩れる。
女生徒たちの歓喜の悲鳴を背後に聞きながら
江野は職員室に向かった。森川は教室の方へ
少し振り向くと、軽く舌打ちした。

江野は職員室に入ると、自分に割り当てられた
机へ着いた。椅子に腰掛け、テキストを
パラパラとめくる。

「あの～江野先生」
声をかけてきたのは、朝礼で江野を紹介した
澤田教頭だった。

「その服装何とかなりませんか？
　確かに我が校は自由を重んじる学風です。
　が、その格好はあまりに頂けない。
　まるでロック歌手だ・・・」

江野は澤田を仰ぎ見る。

「理事長からは何も言われてませんが・・・・・」

「本当に理事長の許可を得てるんですか？」

「僕は次の時限まで授業がありませんので、

　離席させてもらいます」
江野は澤田を無視して席を立つと、職員室を出て行った。

「あの江野先生？・・・ったく、もう」
澤田は苦虫を噛み潰したような渋面をつくった。